朝顔の栞

「せっ！　せっ！」
　まだ日も上らぬ薄靄の中に茫洋として佇む箕輪城。その中庭から、規則正しい掛け声が聞こえてくる。
　身の丈は六尺余、鍛え上げられた二の腕は丸太のように太い。筋骨隆々な裸の胴に袴姿で模造の刀を振るう偉丈夫は、声を掛けるのも憚られるくらいの鬼気迫る形相で、己が前に立ちはだかる架空の難敵に、赤い竹棒を一心不乱に打ち付けていた。
　その一太刀一太刀が覇気を纏って振り下ろされる度に、押しのけられた空気が震え、身体中から吹き出した珠の汗がぴしりぴしりと地面を叩く。
「せっ！　せっ！」
「精が出るな、秀綱」
　地獄の鬼をも一刀の元に斬り倒さんとする、そんな修羅の如き気迫の巨体漢に、さも飄々とした声を掛ける男があった。
「おお、これは御殿様！」
「相変わらず見事な剣捌きよ。お主抜きでは箕輪衆の団結もここまで堅固なものにはならなかったであろうな」
「もったいなきお言葉にござりまする」
　大男は、朱に染まった刃なき刀を振るう豪腕を止め、ゆっくりと近づいてくる男に畏まって平伏する。自らの巨体と比べれば童子のような背丈の男に――自分が自分でいられる役職と環境を与えてくれる闊達なる主人に――感謝と畏敬の念をもって膝を折らずにはいられない。
「秀綱」
「はっ」
　親しみと信頼を込めて自らの名を呼ばれ、頭を垂れた秀綱は恐縮した身が震える思いだった。
「主は何故に剣の腕を磨く？」
「勇将の元に弱卒があってはなりませぬ故」
　すらすらと喉から出た答えに、嘘偽りが入り込む余地は全くない。
「『題連公壁』……蘇軾か」
　中国四川省の政治家であり、また優れた詩人でもあった蘇軾が残した言葉だ。
　信頼、尊敬、畏敬……仕える主への思いは数あれど、秀綱が如実にその思いを体現するのは、戦場で敵に刃を向けた時のみだ。つまりそれは、主君の敵を討ち滅ぼし、互いの命を刈るやり取りの中でのみ輝くということ。
　個の弱さがそのまま主君の命を危険に晒すことに繋がる戦乱の舞台は、裏を返せば個が強ければ負けは減るということでもある。己が一挙手一投足、刀の一振りから槍の一突きに至るまで、その全てから弱さを排して、主君への忠誠を力として示す……上泉秀綱は、そんな義に篤い男だった。
「悪鬼も裸足で逃げ出す、無類飛切の坂東武者にその様に申されては、儂もこの西上野の地を治める者として身の引き締まる思いよ。ははっ！」
　大仰に秀綱を褒めちぎると、わざと破顔して目元の色を隠す。
　子が親を殺して実権を握ることすら日常茶飯事なこの戦乱の時代において、主君を裏切り敵方に

寝返る佞臣は、三食米を嵌める人の数より遥かに多い。
　だが、目に見える確証などなくとも、臣下への信頼と主への忠心のみで刀を振るうことが出来る男達がいなかった訳ではない。
　地に膝をつき、汗まみれの巨躯を折り畳む男は上泉武蔵守秀綱。
　後の世の話になるが、武田家に攻め立てられ箕輪城が落城した際、武田晴信（後の信玄）が仕官を要請したがこれを断り、秀綱の武勇を惜しんだ晴信から『信』の一字を授かり信綱と名を改め、どの家にも士官しないという約束で、諸国放浪の旅を許可されたというのは有名な語り草となっている。
　新陰流の開祖でもあり、弟子と共に全国を巡って剣術を極め、あの〝抜刀将軍〟と名高い足利義輝にも剣術を指南したとされ、その伝説的な剣の強さから、鹿島新当流の開祖・塚原卜伝と並んで〝剣聖〟とまで呼ばれることとなる剣豪、上泉信綱である。
　そして明るく声を掛けたのは御殿様――つまり箕輪城当代城主にして、自身も〝上州の黄班（虎）〟と渾名される稀代の名君、長野業正その人だった。
　その大柄な体躯と勇猛果敢な荒武者振りで知られる秀綱とは対象的に、存命中は武田氏の上野への猛攻を幾度となく退けることになる歴戦の武者でありながら、目鼻立ちがはっきりしており一見優男然とした業正だが、永禄四年（１５６１年）に七十一歳で病死する直前、嫡男の業盛を枕元に呼び寄せて、『我が葬儀は不要である。菩提寺の長年寺に埋め捨てよ。弔いには墓前に敵兵の首をひとつでも多く並べよ。決して降伏するべからず。力尽きなば、城を枕に討ち死にせよ。これこそ孝徳と心得るべし』という壮絶な言を残した猛将としても知られている。
　業正は平伏する秀綱が益々頭を下げていくのをやめさせると、紙に落ちた墨滴が徐々に周りに広がる様に明るくなってきた、東の外郭の先にその顔を向けた。
「もう日も昇る。井戸で水でも浴びてくるが良かろう」
「かたじけない。御殿様にそのような気遣いをさせてしまうとは……。なれど、拙者未だ朝の鍛錬が終わっておりませぬ故……」
「ほう、これはこれは日も昇らぬうちからご苦労なことですな」
　はっと顔をあげて秀綱が声のするほうを見れば、君主である業正の隣に赤ら顔で無精髭を生やした、一癖も二癖もありそうな人物が立っていた。
「真田殿」
　秀綱は露骨に嫌そうな顔を隠そうともせず客将の男の名を呼ぶ。感情に裏表のない、まさに竹を割った様な性格だった。秀綱が立ち上がると、目の前の男とは頭一つ分も視線が合わない。
　男はそんな秀綱の苛立ちなど意に介さぬといった様子で、赤い竹刀を持ち上げしげしげと眺めている。
「これが上泉殿が作られたという『竹刀』ですかな？」
「いかにも。これは拙者が考え出した袋竹刀という稽古用の刀でござる。
　長さは三尺三寸。一本の細竹を、先にいくにつれて四つ割り、八つ割りと裂いていき、その上からなめした牛皮を巻いて赤漆を塗ったもので、木刀より軽く、これで激しく打ち合ってもそう大怪我をすることはなかろう」
　自らの主君も見ているとあってしぶしぶといった風で説明した秀綱は、彼なりに丁寧に話した

つもりだったろうが、機嫌の悪さは声だけでなく、いかつい顔にも露骨に出てしまっていた。
「見事でござるな、この剣も、振るう上泉殿の剣の腕も。いや、まことに見事、見事」
　そこにとどめとばかりに赤ら顔の男が、業正の言葉とは真逆の薄っぺらい褒め言葉を掛けたものだから、ただでさえ稽古後で火照っていた秀綱の血が一気に沸騰した。
　男がひょいと屈んで持ち上げた袋竹刀を秀綱はひったくるようにして奪い返すと、主君の前ということも忘れ「食えぬ世辞など腹の足しにもならん。拙者は水を浴びてくる」と言い残し、肩をいからせながら大股で井戸の方へ歩いて行ってしまった。
「……世辞が嫌いな男だとお前も知っているだろうに」
　秀綱の姿が見えなくなるまで待って、業正は髭をさすって笑いを堪えている様子の男にそう呆れた声を掛ける。
「くく。なに、あれほど実篤な男がおれば長野家も暫くは安泰だろうて」
「多少生真面目に過ぎるのが珠に傷よ。流れてきた身の上の癖に暢気な男もいるというのに。のう、幸綱？」
「はて、誰のことやら」
　この男、後に甲斐の武田一族に仕え、その類稀なる智略と武勇をもって〝攻め弾正〟〝鬼弾正〟の異名で畏れられ、外様衆でありながら譜代の家臣と同列に並ぶことを許される程に、武田家の中でも一目置かれる存在となる。この男が、徳川軍を二度に渡って撃退している智将・真田昌幸や、十勇士で広く知られる〝真田日本一の兵〟の信繁（幸村）など、歴史に名を残す名将を輩出した真田家、その礎を築いたといっても過言ではない。
　戦国の世に生まれるべくして生を受けた男……後世に知られたその名を、真田弾正忠幸隆という。
　しかしこの時はまだ、数年前の海野平合戦での敗北により父・頼昌が討死。領地を追われ、関東官領・山内上杉勢力傘下で上野国箕輪城主・長野業正を頼って落ち延びてきた一兵に過ぎない。
　そんな片や落ち武者同然である真田幸綱（この時、まだ名は改めていなかったとされる）と、片や一国一城の主である長野業正とでは天と地ほども立場に差があり、本来ならこうして並んで立って言葉を交しているだけでも、この時代においては常軌を逸しているのだ。
「海野棟綱始め、主の一族の面々は上杉の支城にて粛々と角を出さずに暮らしておるというのに……わしはこの箕輪の城主だぞ？」
　業正はやれやれといった表情で腕を組む。
　天文十五年（1546年）。まだ上杉氏は扇谷上杉氏と山内上杉氏の両氏が台頭しており、武田晴信と信濃・川中島で幾度となく激突する越後の影虎（謙信）は、まだ長尾の姓を名乗っており相次ぐ家督を巡る騒動や内乱の鎮静に躍起になっている頃だ。
「わははは、知っておるわ。じゃが、友であろう？」
「こやつ、都合のいいことばかり言いおって」
　合縁奇縁とはよく言ったものだ。始めは信濃・小県郡を領していた元国主であるとして、棟綱共々客将として幸綱を手厚く迎え入れた業正だったが、海野一族はある戦の後、同じ山内上杉の

勢力下の城へと移ることを城主である業正に願い入れ、今では幸綱の真田家がここ、箕輪城に残っているのみであった。
　そして形の上では未だ城主と客将で相変わらぬものの、智略と勇名を以って後世にまで語られることになる二人は、どう転んだのか、過ぎゆく時間と共に気心の知れた仲になっていた。
「それにしても今日は良い天気よ」
「うむ。遥か千里の先まで見通せるようだな」
　陽が顔を出して間もないながら、快晴の空を抜けて降り注ぐ初夏の陽射しは、既に夏の模様を色濃く示している。目を細めながら本丸から二の丸へと郭に沿って歩き、まだ人影の少ない城内の様々を二人して検分して回った。
　箕輪城は、榛名白川の流れによって削られた河岸の段丘に梯郭式に曲輪が配された、川と沼が天然の堀を形成する天然の要害である。最大時の箕輪城は、東西五町（500メートル）、南北約十町（1100メートル）にも及ぶ広大なものであったとされている。
　相模の北条氏、甲斐の武田氏、越後の上杉氏がかねてより進行を繰り返し、土地を争う抗争地帯にありながら、堅守で知られる箕輪城を主城とする長野氏は、当主長野業正の代に箕輪衆と呼ばれる在郷武士の集団をよく束ねてそのことごとくを跳ね除け、長野家最大の版図を広げるまでに至ったのだ。
「お？　あれはなんだ？」
　急に立ち止まった幸綱が指差す方を見れば、箕輪城二の丸の石垣の前の地面に、だれが立てたのか古びた長槍が刺さっており、その穂先から柄にかけてくるくると植物のつたが一本絡み付いている。その根元は隣に置かれた土入りの桶へと続いており、他にも数本のつたがどこへ伸びようかと中空で思案している。どうやら誰かが故意に置いたものらしかった。
「よいのか、業正？　今にもへし折れそうな一本とはいえ、槍は槍。幾多の人を殺めたかもしれん武具をあのように無造作に突き刺しておいては、おお！　どのような祟りがあるか！」
　そう言ってまた幸綱はくっくっと悪びれもせずに笑う。
　神仏、ましてや怨霊など、どこまで信じているのかも分からない幸綱だったが、永禄二年（1559年）に武田晴信が出家して信玄と名乗ると、自らも付き従い仏門に入り、剃髪して一徳斎と号したというのだから、人は変わるものだ。
「よい」
　幸綱のからかう仕草など一向に介さずに、業正はつかつかと槍の元へ歩み寄ると、力を込めて槍先を赤茶けた地面にぐいと押し込んだ。
「これは朝顔だろう」
「朝顔？」
　この時代、朝顔という植物はまだ観葉植物として広く普及していた訳ではない。
　元々は奈良時代に遣唐使がその種子を持ち帰ったのが始まりとされているが、専ら下剤や利尿剤などの薬として種子が利用されているだけであったものが、江戸時代の朝顔売りなどで庶民にも広まるようになり、その夏らしい爽やかな色合いと多種多様な変異種の多さから観賞用として人気を博していくことになる。

また花は古来より『牽牛花』とも呼ばれており、織姫・彦星の七夕伝説になぞらえて、いつしか花を『朝顔姫』と呼び、花が開けば織姫と彦星が出会えたとして、縁起の良い花、そして夏の風物詩として人々に親しまれるようになっていくのだ。
さて、先にも述べたが、この頃の朝顔はまだ生薬として栽培されているのみであった。
しかしその夏らしい色と、見目の良い漏斗状の花弁を好いていたものが、血生臭い戦国時代を生きる者の中にもいた。長野業正はそんな一人だった。
「一度だけ見たことがあるが、細い蔓を他者の身体に巻き付けては丈を伸ばし、朝方に青や桃の可愛らしくも爽やかな花を付けるのだ」
昼には萎んでしまうから『朝顔』なのだと業正は楽しそうに幸綱に言う。
「成るほど。故に槍が突き刺してあるのか」
つまりこの槍は、朝顔の成長する指針なのだ。
（数々の人の命を奪ってきただろう槍を道標とする……まさにこの戦乱の世そのものではないか）
業正は自分の着物が汚れるのも厭わずに右膝をつくと、水桶から右も左も分からないように伸びている茎の先端を掴んでは槍の柄に二重、三重と巻き付けてやる。そうして全てのつたを槍に纏わりつかせてから膝を払い、時世に翻弄される自らの縮図を見た気がして苦い顔の幸綱の方へと向き治った。
「まるでお主のようにしつこい蔓よ。なれど、可憐な弁が花開くまではもう暫くかかるだろう」
この男にしては意外なことを言う。業正は幸綱に、いつまでも長野家におらずに、真田家を立て直す為に頭を捻れと伝えたいのだろう。
ひとたび戦になれば〝逃げの業正〟と言われるほどの守り上手で、奇襲を得意とし、引き際を見極める慧眼を以って長野家の版図を広げてきた英傑である業正だが、普段は人柄も温厚で人情深い。
ここで上野長野家に忠誠を誓ってしまえば、業正は喜んで幸綱を家臣団の末席に加えてくれることだろう。智略に長けた幸綱が加わることは長野家としても利に適っており、客将扱いにもかかわらず、既に一族ごと匿ってくれている業正のことだ、幸綱が家臣に徴用されればひとまず、真田家は拠り所を見つけた形になるだろう。
だが当の業正は、遠回しにだが他家へ仕えろと言う。
「ふん」
（余計な世話だ）
しかしこの智略・謀略を是とする赤ら顔の髭男にも、曲げられないものはあった。
今は遠い知り合いを頼る形でここ上野に落ち延びてはいるが、それは決して腰を落ち着け、骨を埋める為ではない。
幸綱にも生まれ育った土地がある。かつて山内上杉家を主家としながらも、海野平の戦いで武田・諏訪・村上連合軍により奪われた旧領を奪回し、真田の姓を再び戦の表舞台へと引き上げることこそ、この男の生涯を賭けての目標だった。
あくまで仕えるは、真田が先祖の武功のみ。その為に利用こそすれ、この身を賭して仕えるほどの将など存在しないというのが、当時の幸綱の持論だった。

（儂が蔓だと？　馬鹿馬鹿しい）

幸綱はちっぽけな花の生涯になど興味はない。

彼の人生を彩り飾るべくは、戦場で足を踏み鳴らして近付いて来る、むせ返る死の臭いと一瞬の生の輝き。滾り、それでいていざ戦闘になればさあっと引いていく血潮の脈動。

求めるのは、戦場独特の貼り詰めた糸のような緊張感。群がる敵を薙ぎ倒したときの征服感と、えもいわれぬ高揚感。鎬を削る命のやり取り。平時にあおるささやかな酒と肴。夜伽の女。

そして何より、飽くなき真田の姓への執着――。

こればかりは、既に一国一城の主である業正には決して分かるまい。

城主と配下の将とではなく、一人の友として真田家を危惧してくれているのが分かる業正の信頼と厚意が、今だけは鬱陶しかった。

槍と蔓が世の縮図などと思った自分の浅はかな考えも一刀の下に斬り捨て、ふと東の空を見やれば、あの上泉秀綱のように巨大な入道雲が湧き立ち、我欲に塗れた幸綱を見下ろしていた。

その夜、箕輪城に来てからというもの一向に変わらぬ平々凡々とした一日を終えた幸綱は、珍しく夕餉も食わず、女を抱く気にもなれず、三の丸の傍らに設けられた真田家の屋敷で早々に床についた。が、天井の斑な板目模様をどれほど眺めていても、今日に限って一向に眠気は訪れない。

幸綱は、こんな日も時にはあるだろうと諦め、縁側に歩いて行って腰を下ろすと、仕方がないので持ってきた徳利の酒を手酌でちびりちびりと飲み始めた。

見事なまでの弓張り月だった。

星々が見えないくらいに明るい、円を袈裟に割った半円形の光源が、静かに幸綱の座す縁側を照らしている。ここはそうでもないが、上空は風が強いのだろう。足早に流れる夏の夜は見る見るうちに姿形を変えていき、月明かりは気まぐれな提燈のように不規則に明滅する。

水を張った田までは距離があるので、五月蝿い蛙の鳴き声もここではあまり聞こえない。業正の好意で住まわせて貰っている屋敷には妻や息子、弟達も寝ているだろうに、今は寝息すら聞こえない夜のしじまだけが住んでいた。

「月見酒も良いものだな……」

ぽつねんと口の端から言葉が零れた。

途端に猪口の湖面に映った半月が、柄にも無い言葉を吐いた幸綱をあざ笑うかのように、黒い雲間に隠れて見えなくなってしまった。

良いとは言ったものの、本心では月などどうでもいいと思っているのが顔に出ていたのかもしれない。

美味い酒は飲めても、優美な月は食えやしない。

食えなければ、飢え死にするしかない。それがこの時代だ。

「やれやれ」

海野平での合戦後、幸綱と共に山内上杉家を頼って落ち延びてきた海野棟綱の要請を受け、長野家が帰属する山内上杉家の当主・上杉憲政は同年、一度だけ長野業正を総大将とし、信濃の佐久郡への出兵を行ったことがある。

故郷を奪還せんと意気込んだ幸綱も嬉々としてこれに参加したが、佐久郡の大井氏、平賀氏、内山氏、志賀氏らは戦わずに降伏。元々この戦にそれほど乗り気ではなかったのか、業正はそのまま諏訪頼重と和解して、旧真田領である小県郡までは兵を入れずに帰還してしまっている。

真田の姓と旧領奪還に尋常ならざる執着を持つ幸綱が激しく憤ったのは言うまでもない。それでも幸綱が「海野はもはやこれまで」と悔しそうに言い残した棟綱と共にこの城を去らなかったのは、ひとえに長野業正の政治、軍略両面の手腕に惚れ込んだからである。

実際の戦闘は皆無であり、業正の実践での軍配の良し悪しを直接見てはいないのだが、調略、謀略のしたたかさと不安要素を一つずつ丁寧に潰していく入念さ、将としての肝の大きさと人望、求心力。その全てで業正は幸綱の想像以上の武将だった。

それ以来、もう暫くこの男の実力を見てみたい、そんな気持ちにさせられた幸綱はこの箕輪の城に残り、暇さえあれば業正と毎日のように軍略談義をしているのだった。

（思えば長く世話になっているものだ）

今日一日の悶々とした気持ちに、今更理由付けなどいらないことは重々分かっていた。

心中ではこのままではいけないと思いつつも、歴戦の将である業正との対話はいつも有意義なも

のなのだ。予想だにしない話を聞かされることも多く、なかなか真田家復領の目処が立たないこともあり、気づけば五年もの間、こうして上野の地で草を食んでいる。
　そんな業正との会話の中で聞き及んだ情報によれば、現在の信濃国小県郡は村上義清が事実上支配しているものの、当主であり親でもある武田信虎を駿河へと追放し家督を相続した嫡男・武田晴信が、周辺の豪族や士族達の土地を次々と手中にしながら、虎視眈々と信濃全域を狙っているらしい。
　何でも、弱冠二十歳の当主晴信を担いだ武田方の御輿は、破竹の連勝を続けているらしい。既に諏訪氏、大井氏、藤沢氏といった信濃の諸将をも怒涛の勢いで打ち破って責め滅ぼしており、小笠原氏や村上氏といった強大な勢力でさえも、次は我が身かと戦々恐々としているという。
　そして信濃を平定した後は、越後の上杉氏にすら風林火山の旗指物を向ける腹積もりである……といったようなことだった。
　村上義清が治める旧真田両のある信濃の小県郡も、いずれこのままでは武田の割菱門の前に飲み込まれることだろう。武田の若獅子は、それ程までに戦上手なのだという。
　だが、そうなればより一層、真田旧領の奪回は難しくなる。
（武田晴信という男、一体どれほどの将器なのか……）
　長野家と山内上杉家の間柄もここ最近では芳しくないとの噂も幸綱の耳に入ってきており、上杉という後ろ盾を失った長野家が武田、北条といった強大な軍事力にいつまで抵抗していられるかは、率いるのがあの名将・長野業正とはいえ、霧の山道を馬で駆けるくらいに危険で不透明なことだった。
「儂の目が黒いうちに、進退を決めたいものよ……」
　柄にもなくしんみりとしてしまった幸綱は、顎に蓄えた立派な髭をさすりながら、月の消えた猪口の酒を、一息で飲み干し、早瓜を齧った。
　かっと熱くなる腹の中からほうと一つ息を吐き出して、掌に収まる小さな器とまだ青みの多い瓜を檜の縁側にそっと置く。久しぶりに酒肴を自分で整えたが、酒はともかくろくな肴は準備出来なかった。
　ずいとせり出した低く深い軒先の延長線上に隠れていた半月が、ようやく飲み終わったかとばかりに顔を覗かせ、庭先に植えてある桜の古木が黒ずんだ軒先にさわさわと緑葉の影を落とした。
　明日は碓氷峠近くにでも遠乗りに行こうかとぼんやり考えていた幸綱は、あっと息を飲んだ。
　風情ある日本庭園に、ではない。
　珍しくしんみりしていても、生来の真田幸綱は花より団子、月より酒。腹に溜まらぬなら、戦場の空気と一緒で、吸い込んでは吐き出すだけ……そんな男だ。
　果たして幸綱が無言で見つめる手入れの行き届いた庭先には、玉砂利を踏みしだいて、元からそこにあった置物のような、気配を感じない影が一つ。
　朧月に映し出されたのは、小柄な全身に真っ黒な装束を纏った、男とも女とも知れぬ黒子の姿だった。
「……曲者か」
　いつの間にそこにいたのか。人の気配には鋭い幸綱ともあろう戦人が、目で見るまで気が付かな

かった。
　恐らくはどこかの家の忍びだろう……それも手だれだ。人事のようにそんなことを思いながら、幸綱は曲者からさっさと目を切り、再び手酌で命の水を猪口に注ぐ。
　この時代、忍びと呼ばれる間者は諜報活動が主な仕事で、敵国深くに幾人も潜り込み、徴兵や武器の売買、町衆の感情などを調べ、仕える家へと報告する。専ら潜入調査であり、決して正体を見破られてはいけない。
　その忍びがこうして目の前に姿を現している……その意味することは、
（恐らく儂がここで騒いだところで、誰も来ぬ）
　もしくは、叫び声を上げる前に凶刃が喉元を貫くか。いずれにせよ、忍ぶ者が眼前に姿を現した時点で、次の朝日は望むべくもない。
　故に幸綱は、忍びを目で捉えた時点で、さも当然のように容易く明日の生を諦めた。
（真田家の再興に至っては……仕方がない。出来れば自らの手で叶えたかったが、こうなっては弟達に後を託すことにするしかあるまい……）
　或いはまだ幼い息子に、か。既に自分以外の親族がこの世を去っていないことを願いつつ、幸綱は土を焼き固めた小さな器を持ち上げ、静かに一口傾ける。
　酒は変わらずに美味かった。
「人生最後の酒じゃ、飲み干すまで待たれい」
　友人にでも頼むようにそう言って、ぐいと一息で猪口の残りを飲み干すと、意外なことに忍びの方から声を掛けてきた。
「いや、実に潔い飲みっぷりでござるな」
　声の主は男らしい。予想以上に若い声で感心したようにそう言って、ゆっくりと幸綱の元へ音もなく歩いてくる。
「ふん。自分を殺そうとする者に褒められたところで、毛ほども嬉しくはないわ」
　言いつつ徳利を傾けるが、どうやら酒はもう先の一杯で打ち止めらしい。舌打ちをして猪口の隣に徳利を並べて置くと、幸綱は元々赤い顔を更に上気させ、おもむろに縁側に立ち上がると、酔いの回った大声で口上を述べた。
「酒は切れた！　思い残すことも多々有るが、儂とて戦乱の世を生きておる身、いつでも川を渡る覚悟は出来ておる！」
　直情径行な武士の中にあっても陽炎のように一際燃え立つ猛々しさで、幸綱は黒装束に全身を包んだ間者を睨み付けた。
「勘違いをしているようでござるな、真田幸綱殿？」
　隙あらば手足の一本くらい道連れに往生してやろうと身構えた幸綱の目の前で、驚くことに忍びの男は黒々とした地面に方膝をついて頭を垂れた。
「拙者、名を佐助と申す者。此度は主君からの言付けを届けに参った次第でござる」
「言付けだと？　主君とは一体誰のことだ？」
　続けて発せられたのは懐かしい名前だった。
「山本菅介でござる」
「なんと！　お主、山本殿の遣いであったか！」

別名山本勘介。武田家の軍学書『甲陽軍鑑』によれば武田軍の伝説的兵法家であり、抜群の軍配の腕を持ち、武田家の多くの戦に出陣し、当主・晴信に献策して諏訪氏、村上氏といった強大な敵との戦を指揮し、またこれを滅ぼしている。

築城術にも長けており、菅介の築いた海津城の城主となった武田家の武将・春日虎綱は、この城を見て『武略の粋が極められている』と感嘆の意を評したという。

その数々の活躍から菅介は、かの劉備玄徳に見出され、策士の亀鑑とされた諸葛孔明のような〝軍師〟と呼ばれるようになるのだ。

「三年ほど前に武田晴信様の元に入られてより、その功績目覚しく、現在は御館様の懐刀として政略軍略の下問に答えておられる毎日にござりまする」

「それはまことか！　そうか、山本殿が武田に……」

菅介は牢人生活が長かった。二十六歳で武者修行の旅に出、諸国を放浪しながら京流兵法を学び、城取り（築城術）や陣取り（戦法）を極め、三十七にして今川義元に仕官せんと駿河に渡った。

しかし義元は菅介の異形の容姿や貧しい身形を嫌い、『小者の一人も連れず、城を持ったことも兵を率いたこともない男に、どうして今川家の軍略を任せられよう』と一蹴している。

今川家への仕官が叶わなかった菅介はその後、武田家重鎮・板垣信方に見出され、甲斐の国主となったばかりの武田晴信の下に推挙されるまでの九年もの間、牢人として駿河の地で細々と、苦労絶えないその日暮らしをしていくことになる。

余談になるが、仕官した武田家の若き当主・晴信と全国津々浦々の諸将について論じた際、菅介はこと今川義元について『討死』を予見しており、その通りに永禄三年（1560年）五月十九日、義元率いる今川の大軍勢は織田信長の軍勢の奇襲に合い、総大将である義元は討ち取られ、今川家は没落の一途を辿ることになる。有名な桶狭間の戦いである。

幸綱とは駿河に渡る前の牢人時代に信濃の真田領で出会っており、数か月の間宿と飯を提供する代わりに、豪族同士の小競り合いを鎮める策を出して貰ったことがある。

出会いは最悪だった。真田家の側臣である海野六郎（真田十勇士とは別人）が、岩尾城を通り掛かったみすぼらしい格好の菅介を捕えて拷問にかけようとして騒ぎ立てたのだ。

容姿は醜く隻眼で痘痕面。おまけに足が悪く、片足を引きずる様に歩いていた菅介を皆気味悪がって口々に罵った。あわや磔になろうかというところで、偶然近くにいて騒ぎを聞き付けた幸綱が止めに入り、粗略に扱わないよう六郎を窘め、菅介に侘びた。

これがきっかけで菅介は暫く真田の里に留まることになる。

短い間だったが互いに智謀を以って敵を翻弄し、これを討ち倒すといった気風がよく似ており、再び菅介が旅に出ると申し出た時にはがっちりと肩を組み合い、男泣きに泣いたこともあった。

（ようやくあの男の才気に気付くものが現れたか）

もう十年以上も昔のことをありありと思い出し、幸綱は込み上げてくるものを必死で押さえつけた。当時、別れ際に真田に仕官せぬかと言いかけたものだったが、猫の額ほどしかない真田の領地に縛っておける器ではないと、泣く泣く引き止める言葉を飲み込んだものだった。

「して、その山本殿が拙者に何用であるか？」

業正から聞いたところによれば、武田晴信は方々の国に三ッ者と呼ばれる隠密組織を常に放ち、甲斐に座していながら全国各地の情報を握っているという。まるで全国を廻り歩いているような印象を持たれることから、町衆の間では「足長坊主」と渾名されているとのことだ。

第四次川中島合戦の頃になるとこの情報の収集範囲はさらに大規模になり、ののうという歩き巫女――くの一として、巫女に扮しながら各地の情報収集を行う――も加わり、晴信は調略・諜略により諸将を寝返らせ、戦わずして城を落とす策を好む様になる。

今、真田の姓がこうして長野家の世話になっていることも、全て武田方には筒抜けなのだろう。そして、こうして忍びを使者として遣わせるからには、長野業正の耳には入れたくない話なのだろうとは容易に想像出来る。

「単刀直入に申すならば……」

佐助と名乗った忍びは顔を上げると、月明かりを映しこんだ意思の強そうな目元だけを黒い布被りの間から覗かせ、一泊置いてこうはっきりと述べた。

「真田幸綱殿に、我が武田家に来て頂きたいのでござる」

『急な病にて参ること叶いませぬ』
　そんな文が業正の元に届けられたのは、定例の軍議が開かれる当日の朝のことだった。
「それほどまでに悪いのか？　幸綱の容態は」
　真田殿の小姓が参ったと寝所で聞かされた業正は、寝間着のままでその文を受け取ると、小姓から文を預かってきた長野家筆頭家老・藤井豊後守友忠にそう尋ねた。
「小姓の話では、なんでも寒気が止まらず、反吐で床を汚し、小便にも血が混じり、立ち上がることすらままならないとか。……難儀なことですな」
　そう言う割には全く心配ではなさそうな表情で、友忠はやれやれと首を振る。
（ふむ……）
　古くから檜扇の御旗の下に仕えてきた藤井家を率いる当代・友忠は、上泉秀綱と並んで長野十六槍の一人にも数えられる勇猛果敢な将であり、新参の客将でありながら長野家当主・業正に取り入ったも同然で大きな顔をしている真田幸綱が、目の上の瘤の如く目障りで仕方がなかった。
　これは何も友忠に限った話ではなく、公の場では自らと同じ業正配下の一将でありながら、二人でいる時にはさも砕けた雰囲気で主と話す幸綱に、苛立ちを覚えている家臣が多いのもまた事実だった。
「うむ」
　じっと天井を見上げ、何やら思案を巡らせているらしい表情をしていた業正だったが、おもむろにそう言って両膝をぽんと打ち、友忠に告げた。
「確かに聞き届けた。皆には、幸綱は暫く養生すると伝えよ」
　たったそれだけの下知だったが、有無を言わさぬ命令でもあった。
　自分ではない遠くの誰かを射抜かんとするような業正の双眸には、抜身の刀を思わせる冷たい光が宿っており、優男の背後に〝上州の黄斑〟の片鱗を見た気がして、戦場の雄はごくりと喉を鳴らし、吐き出すように叫んだ。
「承知！」
　平伏する友忠が去った後、業正は自らの小姓を呼ぶと筆を走らせ、書き上げた墨が乾かぬうちから、幸綱が暮らす三の丸の屋敷へと遣いを出した。

「業正殿の遣いだと？」
　朝餉を腹に掻き込んでいた幸綱は、予想以上に早い業正の対応に驚きの声を上げた。その顔の血色は良く、とても病気で床に伏せっている様には見えない。
　それもその筈。病で寝込んでいるというのは真っ赤な嘘なのだ。
　佐助が武田家に仕官しないかと言ってきたのは、山本菅介の推挙によるものだった。
　廻り廻って武田の軍配を預かる武将となった菅介は、間者の報告から、かつて世話になった真田家が上野の長野家に匿われていること、幸綱は未だに信濃・小県郡の旧領奪回を望んでいることなどを知り、晴信に進言して幸綱の長野家からの引抜きをはかったのだ。
　佐助は月が雲に隠れ、辺りが暗くなると『返答は行動にて示すべし』と言い残し、再び弓張りの月が現れた時にはもう、霞のように消えてしまっていた。

軍議に出ては、業正や他の家臣の目を盗んで武田領に出立する準備がしにくくなる。それ故に病で伏せっていることにして、軍議が行われている間に馬などを用意させる手筈だった。
その為に、自分が急病であるとの知らせを小姓に持たせて、既に業正の元へと送り出してある。今朝早くのことだった。
（さては見通されたか）
こうも早く遣いがくるということは、よもやあの一筆だけでとは思わないが、武田方に内通していると疑われたのかもしれない。人の感情の起伏を読み取ることに聡い業正ならば、ありえないことではなかった。
病の身という段取りなのだ。面会を謝絶しても良かったのだが、離反を疑われている以上、武田領までの道中はどこに長野家監視の目があるともしれない。ここは業正の使者に会って、改めて離反などしないと思わせなければいけなかった。
「会おう」
本当の病気のように冷や汗と青白い顔で、幸綱は箸を置いた。
使者に促されるまま屋敷の敷居を跨いで外に出た幸綱は、そこで病の素振りも忘れるくらいに驚きを隠せない様子で、ぐるりと辺りを見渡した。
「こ、これは……一体何事！」
馬、馬、馬。屋敷一帯を埋め尽くさんばかりの栗毛の馬が、一様に馬飼に差し出された草を食んでいる。
「御殿様のご好意にござりまする」
と、業正の小姓・東原母七はにこにこと笑って言った。まだあどけなさの残る中にも一本芯の太さを感じる、端正な顔をした少年だった。
この時代、小姓は秘書的役割から戦場では本陣を守る最後の要まで、主君の身の回りの全てを受け持っていたので、幅広い知識と教養、武芸まで精通していなくてはとても勤まらなかった。
「真田様の容態をお聞きになられたお殿様は、『それはいけない。今回の所労はこの城内にある医薬では到底治るものではなかろう』と申され、この文と馬を引き連れて真田様の元へ行くよう私に命ぜられました」
母七から達筆な字で書かれた書面を受け取った幸綱は目を丸くした。
そこには甘楽峠（現在の鳥居峠）を越えた先に良薬があろうと記されており、軍議や出仕は当面気にしなくてもよいこと、今日明日中にも出立して療養することとの旨が書かれてあった。
（これではまるで、体よく儂をこの城から追い出したい様ではないか！）
背信の為に仮病を使ったとはいえ、こうもとんとん拍子で長野家を追い出されるとは思ってもみなかった幸綱は、今更ながら極力悪く見える様に酷い咳をして、母七に『思うより具合が悪く、今日明日内ではとても出立出来そうにありませぬ』と母七に業正への言付けを頼み、そそくさと屋敷に引っ込んでしまった。
（いつから感付いていた……業正）
残っていた朝餉も片付けさせ、幸綱は一人座敷に胡坐を掻いて考えていた。
（良薬云々というのは単なる口実だろう。あの業正のことだ、儂が城の内側から武田方の手引き

をするのを恐れて、これはいい機会と放逐する気であろうな）
　武田の間者に会ったことまで業正が知っているとは思えなかったが、幸綱は長野家の客将扱い。おまけに重臣達からの評判も芳しくなく、団結して一枚岩に近い長野家を裏切る者がいるとしたら……。そこで幸綱の名が念頭に上がるのは当然のことだった。
　根回しの早さを見れば、業正が以前からこういう事態を想定していたとも考えられる。
（不安の芽は早めに摘んでおこうという腹積もりか）
　武田や北条といった国々からしても、この箕輪城を押さえるということは、他の勢力の喉元に匕首を突き付けることを意味する。あの小田原城にさえ引けを取らないとまで言われた堅牢な城は、立地条件と深い堀によって守りに易く攻め難い。他国への侵略の基点としては最適な場所だった。
「儂は……どうすればいい？」
　誰にともなく幸綱は呟いた。
　幸綱が業正を友と呼んで親しくしていることに他意はない。以外と思われそうだが、こうして武田に誘われている今ですら、自らが間者になるつもりは毛頭ないし、そもそも長野業正という将の知力の粋が詰まったこの堅牢な箕輪城は、小さな豪族一人の手引きで落ちるようなものではない。
　だが業正もそう思っていたかどうかは、本人しか知らないのだ。
　難癖をつけて改易したり、長野家に無理矢理忠誠を誓わせたりしないだけ、業正が幸綱を友人だと思っている証左だと願う他なかった。
（もういっそ全てを業正に打ち明けるか……）
「父上！」
　投げやりそんなことを思い、立ち上がった幸綱の膝頭に軽い衝撃が飛び込んできた。
「どうした、源太」
　幸綱の着物をわしと掴み険しい顔を上げたのは、幸綱の長男で、将来は父親と共に武田軍の主要な戦いには必ず名を連ね、弟の昌輝らと戦場を駆け巡って数々の武功を立てた真田信綱。源太とは、その幼き日の姿である。
「父上はお行き下さい！」
「なんだと？」
「父上は真田家の再興を、といつも申していたではありませんか！　……確かに武田は真田の里を奪った憎き仇敵ではありますが、今、真田の炎は風然の灯火。大水に晒される篝火の如く、いつまでも燻ったままでは瞬く間に時流のうねりに飲み込まれ、燃え上がる前に消えてしまいます！」
　大福のように柔らかそうな頬を紅く上気させ、決意の籠もった眼差しで髭もじゃの父を見上げる源太は、この時まだ九歳。幼き体に似つかわしくない朱塗りの袋竹刀を芋蔓で袈裟に背負いながら、少年剣士はよく通る声で言う。
　上泉の侍は、嫌っている筈の幸綱の息子にも稽古をつけてくれたらしい。額は汗だくになって息も荒く、必死に訴えかける息子の姿を見て、幸綱の口元は知らず緩む。
（言う様になったではないか）

　海野平の戦いはもう五年も昔、源太は四歳の時だ。今よりもっと小さかった頃に領土を奪った相手を『憎き敵』などと言う息子に、幸綱は頼もしい安心感を覚えていた。
「父上だけは先に武田へと出立し、折を見て迎えを寄越してください。それまでの間は、叔父上や私が真田家の家名を守ってみせます！　我ら真田が白狐の小火のように武田を引き摺って、いずれ父上の……真田の熾した火種は、この戦乱の世で炎と成るのです！　ですから父上……父上？　なぜ笑っておられるのです？」
　幸綱は何も言わず、こそばゆい感覚と共に源太のいつの間にか大きくなっていた体を抱き上げると、この男にしては珍しい優しい笑みを浮かべた。
「頼むぞ、源太」
「はっ！　勿論でございます、父上！」
　幸綱は息子の豆だらけの手に背を押され、今夜にも武田領へと馬を出すことを決めた。

「どこまで来た？」
　幸綱は早駆けさせている栗毛の馬の歩調を緩めながら、先日の黒装束とは打って変わって、旅姿に手甲脚絆だけの簡素な格好をしている佐助に聞いた。
「あれに見えるが甘楽の峠でござる」
　同じく黒馬の歩調を緩めた佐助に言われ、幸綱は正面に見える緑の山稜が五年前に越えて落ち延びてきた峠であることを思い出した。
「あの峠を越えれば真田の里か……ふん、長野家の間者には見つかっておらんな？」
「恐らくは」
　望郷の念は一段と強くなった。旧領を目前に感情が揺らいだのを悟られないよう、ぶっきらぼうに幸綱は聞いたのだが、当の佐助は感情の籠もっていない声音で、事務的に淡々と答えるだけだった。
　箕輪城を宵闇に紛れ出立して幾刻か。目立たないよう供も小姓も連れず、どこからともなく黒毛の馬に乗って現れた佐助だけを連れ、夜は山道から転落しないよう慎重に、日が登ってからはどこに潜むとも知れない長野家の忍に見つからないよう、佐助の指示に従いながらゆっくりと馬を走らせ、気が付けば幸綱は甘楽峠の麓の村まで来ていた。
　佐助が村の長の所へ行っている間、馬を下りて佐助と同じく手綱を木に結わえた幸綱は、ほうと一つ、溜息とも取れる息を吐く。
（これでよかったのだろうか……）
　他人には常に無愛想。時に傍若無人で取っ付きづらく、怒れば烈火の如く猛々しい幸綱が、こんな風に女々しく決断を振り返ることなどそうはない。
　それだけ五年という歳月は、眼前に立ち塞がる数多の敵を屠る為だけに腕を振るってきた幸綱にとって、あまりに……あまりに長かった。豪放磊落で、戦場での槍働きはまさに型破りの猪武者。奇策妙計の網を巡らしはするものの、大事の前では小事の顛末など端から眼中にない……そんな男だった幸綱に、人と成りを変える程の転機があったのは間違いない。
　それまで戦場で敵を討ち滅ぼす為の策しか練ってこなかった幸綱が、敵味方双方の兵を失うことを惜しみ、調略を用いて無血開城を望む武田晴信の志に同調し、これに尽くすようになるのに、故郷を追われたこの五年の歳月は無関係ではないだろう。
　幸綱は旧知の友である山本菅介の顔を、そして同じく友人の長野業正の顔を交互に思い浮かべた。
「義か、実か……」
　真田の里を追われ、一族郎党匿ってくれた業正の下を黙って出立してきてしまった時点で、幸綱の心は決まっている。家名再興と領土への凱旋を悲願にしてきた幸綱にとって、事実上仇敵の一角とはいえ、現在勢いに乗っており、旧真田領を支配している村上氏をも凌駕しつつある武田に帰属することは、義を捨て実を取ったに他ならない。
　裏切り、寝返りが日常茶飯事の戦国時代において、忠義を重んじ他家の引き抜きに応じなかった武将は先の上泉秀綱を含め多々いるが、一方で、強大な戦力による恐喝、賄賂、魅力的な地位などの前に膝を屈し、忠義を尽くすべき主家に反旗を翻し、家名に泥を塗り、名を貶めた者も多い。

「幸綱様」
　戻ってきた佐助に名を呼ばれ、黒々とした思考の渦から幸綱は身を引き上げる。
「屋敷の一角を借りられることとなり申した。早や酉の刻も過ぎ、まだ明るいとはいえいずれ日も暮れる。甘楽の峠を越えるのは明朝にすべきかと」
「そうか」
　甘楽の峠――現在の群馬県と長野県を繋ぐ鳥居峠は日本の中央分水嶺に当たり、群馬県側に降った雨は吾妻川、利根川を経て太平洋へ。長野県側に降った雨は千曲川（信濃川）の流れを下って日本海へと流れ込む。川沿いに緩やかな道が続く群馬県側とは逆に、真田の里のある長野県側は曲がりくねった山道と厳しい傾斜になっており、夜間に馬で越えるのはかなりの危険を伴った。
「馬を頼む。儂も一宿の礼ぐらいはせねばなるまいて」
「……お待ちくだされ」
　背を向け村長の屋敷に向かおうとした幸綱を、佐助はこの男にしては多少慌てた様に引き止めた。
「どうした？」
　振り返ると佐助は四つん這いになり、地肌にべったりと耳を当てている。まるで地面の囁く睦言でも熱心に聴き取らんとしているようだった。
「……馬の足音が。ひい、ふう……どうしたものか……」
「追っ手か」
「まだ分かりませぬ」
　なれど、ここは拙い。そう言うなり、佐助は不意に手甲の裏から短い矢尻の様な刃物を取り出し、幸綱でさえ目を見張る電光石火の早業で結わえてあった太い二本の手綱を一刀の下に断つと、馬尻を蹴り飛ばして馬を逃がしてしまった。
「こちらへ」
　言われるまま大急ぎで近くの竹林に身を沈め、二人して青竹の間から様子を窺う様に僅かに顔を覗かせた頃、幸綱の耳にもようやく大勢の人の話し声と馬脚が地面を踏み鳴らす雑踏の音が聞こえてきた。
「よもや業正が……」
「否」
　最悪の事態を想像し、血走る瞳で刀の柄に手をかける幸綱を、佐助は冷静に諌める。
「幸綱様一人を追いかけてきたにしては数が多すぎる。……それに聞こえてくる声には笑い声、それも女、子供のものまで含まれている様でござる」
「何！　女に子供だと！？」
　女子連れで追っ手に加わる馬鹿はいない。幸綱は首を傾げて訝しむが、佐助の横顔は微動だにしなかった。
「ふむ……確かに子供の声がするな」
　それも、どこか聞きなれた様な……。
　そんなことを思っている間に、一団の先頭が村の入り口に姿を現した。
「な！」

幸綱が驚いたのも無理はない。
「上野に残してきた我が一族が、なぜここに来ておるのだ！？」
そこには見慣れた真田家家臣の姿があったからだ。
幸綱が武田に就くことは近しい縁者と重臣中の重臣数名しか知らぬ秘中の秘であり、昨晩もわざわざ人目を忍んで暗々裏に出立して来ているのだ。配下の兵がこんな上野も外れの村に、しかも「どこにいらっしゃいますか？　旦那様！」などと叫びながら、自分を探しに来る筈がない。
しかし、そうしている間にもぞくぞくと、昨夜、無事武田領に着いたらすぐ迎えを寄越すように計らうと言って秘密裏に別れたばかりの正室・恭雲院を始め、側室の阿続方、古参の穴山源覚、伊勢崎五郎兵衛といった重臣の姿も見える。そして何より刮目すべきは、箕輪を落ちてきたにしては、どの顔にも悲観に暮れる様子がないのだった。
「お待ちくだされ！　罠かもしれませぬ」
「ええい構うものか！　放せ！」
押し止めようとする佐助を振り切り、幸綱は竹薮を出ると「おい！」と大声を上げて一族家臣の下へ走り寄った。
「幸綱様！」
「ああ旦那様！　ご無事で！」
幸綱が輪の中に入ると、家臣や家僕までがわっと幸綱を取り囲み、口々に幸綱の無事を喜んだ。中には泣いている者までいる。
「これは……これは一体どういうことだ？」
見れば馬は皆、業正から贈られたものだ。その背には家具や米俵などが詰まれ、これではまるで海野平で敗北を喫し、戦禍に追われるまま、細く頼りない糸を必死に辿って上野へと落ち延びた五年前のあの時同然ではないか。
「父上……」
足元からか細い声がするかと思えば、真田家を守ってみせると小さな体躯で豪語していた源太が、父に逢えた喜びとこの不可解な状況についていけず、目を白黒させて立っていた。
「五郎兵衛！」
「はっ！」
真田家の現当主に鋭く名を呼ばれ、初老の武者が人垣を割って歩み出る。
「これは一体どういうことだ」
幸隆はもう一度、訳も分からないといった風に、最古の家臣である伊勢崎五郎兵衛に尋ねた。不退転の覚悟で上野に置いてきた筈の親族と家臣団が、はなからこの村で落ち合う約束でもしていたかのように突然現れたのだ。驚くなと言う方が無理である。
五郎兵衛も困惑顔で言う。
「旦那様が箕輪の城を出立された後、見計らったように業正様の老臣がやってきて、恭雲院様に一通の書状を手渡され、『これを我らの追い及ばない所で幸綱殿に渡されよ』と言って、馬に荷を積み、甘楽峠へ急ぎ向かうよう申されたのです。これは業正様直々の命であり、旦那様とはそこで落ち合える手筈になっているから、と」
「業正が？」

「お聞きになっておられなかったのですか？」
　妻を呼んで捻封のされた雁皮紙の手紙を受け取り、果たしてどの様な叱責の文言が綴られているのだろうかと、震える手で恐る恐る書面を開くと、挟まれていた紙のようなものがはらりと落ちた。
　そして文面には、達筆な字でこう書かれていた。
『甲斐に武田晴信という将たる器あり、まだ若いがまたとない弓取りである。なれど、箕輪にこの業正がいる限り、碓氷川を越えて馬に草飼わせよう（領内を侵せるの意）と思ってもらっては困るぞ』
　光沢のある書面に僅かこれだけの文字がしたためられ、しかしその文の持つ意味に、幸綱は呆然と夕焼けに染まりつつある空を仰いだ。
（全て……全て見透かされておったのだ……）
　この時代、武将の家族や家来は人質同然で、将が裏切ったり寝返ったりすれば一族皆殺されてしまうこともそう珍しくはなかった。
　業正は、幸綱が武田に引き抜かれているのを知っていながら、その上で多くの馬を餞別に寄越し、真田一族と家臣の全てを幸綱と共に武田へと送り出したのだ。
　だが、しかし……。
「つつがなく合流出来たようで何よりですな」
　佐助は先までの動揺した素振りが嘘のように悠然と群集へと近付き、幸綱へと微笑んで見せた。
「何奴！」
「よい。武田の忍びだ……」
　それとも長野家の忍なのか、そんなことはもうどちらでもいい。魂の抜けたような声で幸綱は、家来達が飄々とした空気の男へ武器を向けるのをやめさせる。
「佐助。お主も知っておったな？　……下手な芝居なぞ打ちおって」
　あの鬼気迫る顔、あわてた顔、あたかも敵襲であるかのような緊張感、全てが芝居だったのだ。下手なとは言ったものの、三文では足りない役者振りであった。
　この若者は爽やかに笑うと、種明かしでもする様に両手を広げて言う。
「長野業正は一筋縄ではいかぬ偉丈夫ゆえに、正式な武田家の使者として直接の交渉はとうに済んでいたのでござる」
「ほう。ならば儂は、どれ程の値で長野業正から武田に売られたのだ？」
　つまりは、そういうことだ。
　佐助は武田家と長野家の双方に通じていた。
　真田家は、業正によって売られたのだ。
「儂が武田に鞍替えする代わりに、あの男は何を望んだ！」
　友だなどとうつつを抜かしていたのは自分一人だったらしい。現在の武田は、真田の里を含めた小県郡を支配する村上義清討伐へ着々と動いている。地の利に詳しいその土地出身の武将が欲しいのは道理だった。長野業正は、そんな真田幸綱という男の利用価値が最大になるのを待って、武田へと引き渡したのだ。
　だがしかし、返ってきたのは予想外の言葉だった。

「何も」
「な、何だと！？」
「何も望まなかったのでござるよ、幸綱様。長野業正という男は」
　佐助が密かに業正と対面し、幸綱を召抱えたいという武田家の意向を伝えた際、業正は大いに喜んだという。
「『あの男は武勇苛烈にして智略の裾野はこの空よりも広い。失うのは、ここ西上野を預かる箕輪城当代としても、一人の友人としても惜しいが、いつまでも烈火の火種を燻らせておくのも忍びない』と申され、条件としては真田家縁者と家臣の全てを武田家が受け入れることの一点のみ。拙者も驚いたものでござるよ」
　今度こそ幸綱は、自分の中の何かが音を立てて崩れ去るのを感じた。
　改めて長野業正という男の度量の大きさ、一族全ての身を危険に晒してまで我欲に走った自らとの格の違いを見せつけられた気がした。ただでさえ赤い顔を夕陽よりも真っ赤に染め、唇を血が出る程に噛み締めて、幸綱は滂沱の涙を押し殺すように恥じ入った。
（打ち開けるべきだったのだ……何もかも……）
　一言も喋れず、ただひたすら鬼灯のような西日が山間に沈んでいく様を見上げて、恩を仇で返したことを悔いるばかりの幸綱だったが、源太に着物の袖を強く引かれてようやく我に返った。
「父上」
「何だ、源太？」
「これ……」
　そう言って源太が持ち上げて見せたのは、先程文の間から零れ落ちた、涼やかな色が夏の空を連想させる青い押し花だった。
『まるでお主のようにしつこい蔓ょ――』
　ある日の業正の言葉が脳裏に鮮明に思い起こされる。
（儂が蔓であるものか……）
　姿無き業正の影が体に絡み着いているような気がして、幸綱は再び天を仰いだ。

明くる日。
村に一族全てを泊めるだけの空きがある訳もなく、昨夜はなし崩しに村の外に簡素な陣を張り、女子供、それに足腰の弱った老人以外は野営同然に土の上に寝そべった。
幸綱も今日ばかりはと土に直接横たわろうとしたが、「当主がそれでは示しがつきませぬ」と懇願する家臣に宥め賺され、結局借りてきた板戸にぼろを敷いて、その上で夜を明かした。佐助は夜の内に既に、武田領内への通達と峠向こうの村上氏の偵察を兼ね、一人暗闇の甘楽峠に消えている。
「皆の者聞け！」
日も登り切り、早くも油蝉が五月蝿く鳴き始める。村長に礼を述べて幾つかの米俵を渡し、先鋒の家来が出立の準備を終えたところで、幸綱は注意を集め、一晩考えていたことを口にした。
「名族・滋野の流れを汲む真田姓を持つ我らは、村上、武田、諏訪の連合によって先祖代々の土地を追われ、五年の長きにわたって故郷を踏みにじられてきた。我らの命は長野家当主・長野業正に匿われ、この恩義は決して忘れられるものではない。……しかし！　我ら真田家はこれからその恩義にすら背を向け、これよりかつての仇敵である武田の軍門へと下る」
幸綱の朗々とした語りは、遥か後ろの家僕にまで矢を射る様に届き、息をするのも憚られる静寂の中で皆、幸綱の雄弁を聞き逃すまいと一心不乱に耳を傾けた。
「だが我らの心中に燃える志の火は、例えどれだけの苦難に遭い、辛酸を舐めることになろうとも、消えることはない！　故郷・真田の里を我らのこの手に取り戻し、真田の姓を世に知らしめるまでは、我らの魂、極楽浄土へと旅立つことこれないと思え！」
「おおおおおおおおお！」
幸綱の熱にほだされたかのような家来達の叫びは次第に増長し、あまりの大音声に馬が嘶き、雉鳩は一目散に飛び上がり、村の全ての家々からは人が何事かと飛び出してきた。　そんな鬨の声にも似た熱が引いていくのを見計らって、幸綱は一枚の布を頭上へと掲げる。
「今、この時を以って、我ら真田家は長野家への背信すら糧とする不退の覚悟を持ち、武田晴信に臣従し進退共にこれを貫く覚悟で、我が家の戦時の旗紋を……〝六紋連銭〟とする！」
白い幅広の布に墨で六つの丸が描かれた旗印――。
それは地蔵菩薩信仰において、賽の河原からあの世へと旅立つ三途の川の渡し賃と言われる〝六文銭〟。
真田幸綱、そして連綿と続いていく真田一族の覚悟の御旗の起こりであった。

余談ではあるが、群馬県甘楽郡甘楽町には、古くから三途川と呼ばれる小河川がある。
長野家の客将扱いだった幸綱がこの川の名を知っていたかどうかは定かではない。

完